

# 解題と考察



# 「姑蘇繁華図」と絵引編纂

福田 アジオ

## 1 姑蘇繁華図

中国には古くから絵画制作の歴史があり、多くの作品が制作され、今に残されている。その絵画の中心になるのが山水画である。自然の情景を描いており、しばしば特定の場所を描いたかのような表題も付けられている。しかし、山水画は写生ではない。画家が一定の理念に基づいて描き出した世界であり、実際にそのような景色が見られる場所は存在しないのが普通である。山水画は自然の山河を描くが、山や川はこうあるべしという理念に基づいて描かれた図であり、現地比定することなどは無意味なことであると言える。たとえ地名は表示されても、その場所を写実的にスケッチした訳ではない。規範化された構成で組み立てられているのである。そのような中国絵画の特色を知るにつれ、「姑蘇繁華図」の特異性、そして資料的価値の高さが浮かび上がってくる。絵引編纂の素材として「姑蘇繁華図」がいかにか適切な図像資料であるかを確信するにいたった。

「姑蘇繁華図」は現在中国遼寧省瀋陽市にある遼寧省博物館の所蔵であり、国家1級文物に指定されている。清の宮廷画家であった徐揚が乾隆24年(1759)に描いた作品である。長さ12メートル41センチ、高さ36.5センチで、それほど幅はない。長さは、明代に描かれた仇英の「清明上河図」が9メートル87センチであるから、それよりも2メートル50センチも長い。日本でいう絵巻物に相当する、画卷と呼ばれる形式の絵画である。紙本着色である。宮廷画家が描き、皇帝が珍藏した貴重な画卷であるが、そのような絵画は一般的に絹本である。「姑蘇繁華図」が紙本であることは不思議であり、その点での検討の余地はあると言える。今回の研究に際し

て、2005年10月に遼寧省博物館を訪れ、収蔵庫深くしまわれている「姑蘇繁華図」を、長時間にわたって熟覧する機会を得たが、その作品の整い、美しいことに驚嘆し、描かれた内容も子細に観察し、その描写の確かさを確認した。

「姑蘇繁華図」はもともと「盛世滋生図」と名付けられていた。絵の末尾の跋文で、自ら「盛世滋生図」と記していることから来ている。新中国になって現在の名称に変えられた。「盛世滋生」は、繁栄する乾隆帝治世下で皇帝の慈しみを受けて豊かな生活を送っている様相という意味であった。これが支配者中心の名称ということで、1950年代に現在の姑蘇(蘇州)の繁栄を描いた図というように変えられたのである。「姑蘇繁華図」は数奇な運命を経て現在遼寧省博物館に所蔵されている。本来絵は乾隆帝に献上されたものであり、北京の紫禁城に収められ、皇帝が鑑賞する絵であった。画卷に押印された御覧の印章は、乾隆帝が12回、嘉慶帝が1回、そして最後の皇帝溥儀が3回である。乾隆帝を別にすれば、溥儀がいかにか「姑蘇繁華図」を好んだかが窺われる。溥儀が溥傑に与えるという形式で、これを紫禁城から持ち出し、天津を経て長春に運ばれ、「満洲国皇帝」の珍藏品となった。1945年8月の日本降伏に伴う「満洲国」崩壊時に、国外に運び出されようとしたが、瀋陽飛行場でソ連軍によって確保され、その後一時民間に流出したが、1948年に東北文物保管委員会が入手し、東北博物館(現遼寧省博物館)に収められた。その後、北京の中国歴史博物館に移されたが、1985年に遼寧省博物館に戻され、現在に至っている(秉琨1986、戴立強2006、遼寧省博物館2006)。

作者の徐揚は蘇州の人であるが、その詳細な伝記

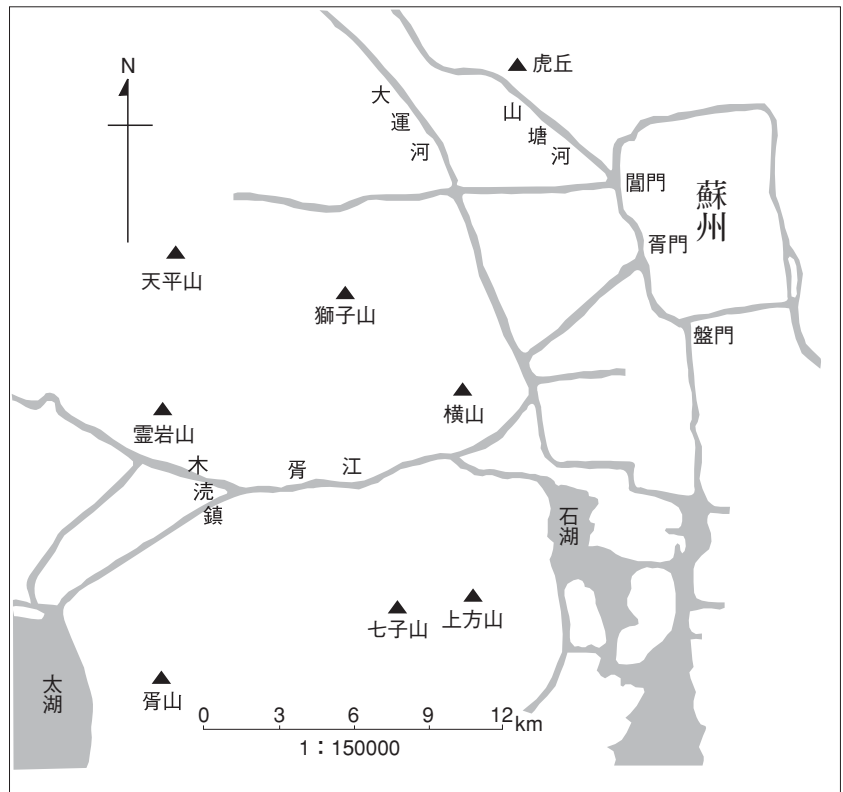
的事実は分からない。生没年も不明である。父祖の代から蘇州に住み、徐揚自身は絵師だったと思われ、また蘇州の地方府の仕事をしてきたようである。高宗乾隆帝が江南地方を視察する1751年の「南巡」に際し、絵を献上して認められ、宮中に召し出され、いわゆる画院画家となった。乾隆の2回目、3回目の南巡に随行し、「乾隆南巡盛典図巻」を制作し献上している。宮廷画家になる前には蘇州で活動していたが、その時の作品として「姑蘇城図」がある（中国国内では失われ、日本の天理図書館に残る）。徐揚の作品として知られるのはそれほど多くないが、現在残されている訳ではない。そのなかで「姑蘇繁華図」は最高の傑作と言ってよいであろう（張英霖 1999、遼寧省博物館2006）。

「姑蘇繁華図」と「清明上河図」の関係は議論されなければならない。従来、「姑蘇繁華図」は「清明上河図」の異本とする考えもあったようである。宋の張拙端が描いた「清明上河図」は、都市とそこでの人々の生活を生き生きと描いた都市図の代表としてとみに有名である。「清明上河図」は明清時代にも少なからず描かれており、「姑蘇繁華図」もその一つと考えようとする意見もある。代表的な「清明上河図」は明の仇英が描いたものがあり、また清代に入って「院本清明上河図」が制作された。周知のように、張拙端の「清明上河図」は北宋の都汴京（現在の開封）を描いたものとされる。市街地の繁栄する様子を多くの建物と行き交う人々で示しており、古くから注目されてきた。そして、それに倣って制作された仇英の「清明上河図」（1541）は蘇州を題材に描いたとされる。そして清代に入り、「院本清明上河図」が制作された。これは5人の画家の合作で、やはり蘇州を描いているとされる。

仇英の「清明上河図」を見ても、そこに現在の蘇州および郊外の地形や景観を見つけることは困難である。「院本清明上河図」になると太湖を描くことから始まり、そこから蘇州にいたる運河や道、そして蘇州城と判断できる描き方をしているが、やはり実際の地形に対応しているわけではない。また事物や人物をより古い姿にしようとしている。その点で、「姑蘇繁華図」は大きく異なる。「姑蘇繁華図」を手

にして歩けば、絵の進みに応じて描かれた情景が実際に目の前に展開するのである。特に山容や運河・河川の様相は現実と「姑蘇繁華図」の描写が見事に一致する。実際に写生したと思われる「姑蘇繁華図」と、やはり理念化された構図で描かれた「清明上河図」は別の存在と言うべきであろう。

「姑蘇繁華図」は必ずしも古くから知られた存在ではなかったが、次第に注目されるようになってきた。蘇州の街と郊外を描き、そこに多くの事物を配し、生き生きと人々の生活を描いている。その特色は人々を惹きつけ、特に清代の生活史を知る資料として重視されるようになってきたからである。「姑蘇繁華図」が最初に写真版で印刷刊行されたのは、1986年刊行の遼寧省博物館・中国歴史博物館・蘇州市地方志編纂委員会編『盛世滋生図』（文物出版社）であった。ついで1988年に巖麗妍編『清・徐揚《姑蘇繁華図》』（香港商務印書館）が出され、その存在が広く知られるようになったものと思われる。現在広く見られるのは1999年に刊行された蘇州市檔案館・遼寧省博物館編『姑蘇繁華図』（文物出版社）である。また各種の観賞用の案内書も出されている。最も精密な印刷物は、清宮散佚国宝特集編輯委員会編『清宮散佚国宝特集』絵巻（中華書局、2004年）に収録された「姑蘇繁華図」である。また、蘇州で刊行された各種の案内書があり、蘇州を訪れた人は「姑蘇繁華図」の存在を知ることになる。しかし、「清明上河図」ほど有名でなく、たとえば大部な案内書で、版を重ねている郎紹君主編『中国書画鑑賞辞典』（中国青年出版社、1988年）には、徐揚も「姑蘇繁華図」も収録されていない。日本では「姑蘇繁華図」全体を鑑賞し、また活用できるように印刷刊行した書物は未だ見られない。「姑蘇繁華図」に関する研究もほとんどない状態である。わずかであるが、「姑蘇繁華図」を資料にして18世紀蘇州を研究した論文が出されている程度である。「姑蘇繁華図」の本格的検討、また「姑蘇繁華図」を活用しての研究はこれからと言える。



## 2 「姑蘇繁華図」の描く世界

「姑蘇繁華図」は中国江南地方の中心都市蘇州を描いた画卷である。このことは作者自ら、蘇州西南部の太湖の湖岸近くの靈岩山から始まり、その麓を巡って木澆鎮の街並みを通して、田園地帯に出て、獅子山を見て、東に向かい、蘇州城の西南部にいたる。蘇州城の外壁を見つつ、北上し、西北部にいたり、そこから西北に運河に沿って進み、虎丘に到着して終わると画卷の巻末で記している。その描く景観は驚くほど写実的であり、実際に現地比定が可能なのである。「姑蘇繁華図」がいかにか写実的に景色を描いているかは、実際に現地に立ってみるとどれもが納得することである。その点では、中国の絵画としては非常に特異な存在である。

筆者が最初に描かれた景観と実際の風景が対応していることを実感したのは、蘇州郊外の石湖の風景であった。石湖北端の越城橋から西南方向に眺めたときに見られた風景は、「姑蘇繁華図」に描かれた様相と全く同じと言ってよいものであった。行春橋が架かり、その向こう側に寺院があり、そこから山が連なり、はるか遠くの山頂には塔が見られる。そ

して、石湖には正方形の人工島が見られる。湖心亭といい、現在も湖上に残されている。絵にはこれらがはっきりと描かれている。このことを体験した後、絵の最初の部分に描かれた人々が行楽に行く山は現在の靈岩山、その次の場面である運河には船が行き交い、道路には多くの人があふれる街並みは現在の木澆の街に容易に比定できるほど、実際と絵が対応していることを発見した。また同様に、獅子山の姿も絵に描かれた姿と同じである。蘇州城についても、絵と現状がよく対応している。これらによって「姑蘇繁華図」が実際の風景を写生した絵であることは間違いないと確信した。

風景の描写は、たとえば一定の高さで低空を飛ぶヘリコプターの上から地上を撮影しているという印象を与える。太湖から蘇州城にいたるコースは、原則として川の北側から南を向いてカメラを向け、近景として川、そしてそれに面した集落を描き、その向こう側に田園や山を描いている。従って、川の南側中心に市街地が示され、北側は原則として登場しない。蘇州城に達すると、今度は堀と城壁を外側から、すなわち西側の斜め上からなめるように見て北上する。詳細に描かれるのは城壁に沿った蘇州城

外の様相であり、各所に設けられた城門、橋、橋のたもとに広がる商店街である。城内の様子は遠景として示されているのみである。蘇州城の西北端まで来て、そこから斜めに進み、虎丘を目指すが、この部分は虎丘にいたる山塘河という運河の西南部から運河とそれに沿って運河の向こう側を走る道路を描き、そこに展開する商店街を示している。運河の手前である西南部はほとんど登場しない。

「姑蘇繁華図」は単なる風景画ではない。そこにはその地で暮らす人々が多く描かれている。街並みだけでなく、道を行く人々、商店で買い物する人々、農作業をする人々、ものを生産する人々、あるいは船を操作する人々、船上で宴会をする人々など、実に多くの人物が生き生きと描かれているのである。それらは、描かれた景観がほとんど完全に現在の特定の場所に比定できることから判断して、実際に清代中期の蘇州とその郊外に暮らす人々を描いていると考えてよいであろう。絵画はいかに写実的であっても、もちろんカメラによる撮影ではないので、特定の時間に実際にその場所に描かれた人物がいたという訳ではない。その場所のイメージを作り出すために作者が配置したものである。しかも制作意図が皇帝に見せるためであり、素晴らしい治世に繁栄した様相を描き出そうとしているのであるから、実際には存在していたとしても意図的に排除して描かなかったものも多いに違いない。しかし、描かれた事物や人物はその場所に相応しい存在として配置され、仮に想像であっても、現実性を帯びていると判断できよう。蘇州とその郊外の景観と、そこに豊富に描かれた人々の所作・行為を把握することによって、清代中期の中国江南地方の生活文化を知る手がかりを得ることが出来ることを確信し、絵引編纂を行った。

「姑蘇繁華図」に描き込まれた事物や人物を数え上げて数量的に把握することがしばしば行われているが、その数字は李華「従徐揚“盛世滋生図”看清代前期蘇州工商業的繁栄」(『文物』1960年第1期)によるものである。「姑蘇繁華図」に登場する人物は全部で12000人余りという。また描かれた各種の船は400艘、商店は260軒余り、橋梁は50カ所、劇

場は10カ所などが見られるという。描かれた人物は4600人と数える説もある(乗現 1986)。

### 3 「姑蘇繁華図」による絵引編纂

絵引は新しい言葉であり、日本の大きな国語辞典にも見出しとして立項されていない。財団法人日本常民文化研究所が編纂して刊行した『絵巻物による日本常民生活絵引』全5巻によって姿を現したものである。この編纂を主導した渋沢敬三が、言葉を窓口にして情報を示す従来の字引に対して、図像を窓口にして情報を発信するものとして絵引という語を用いたのである。過去に描かれた絵画を資料にして、そこに描かれた事物や人物を窓口に、それらが何という事物や行為なのかをキャプションとして付けて示す。図像から情報を引き出し、示すのが絵引である。それが単なる図解辞典でないのは、辞典編纂のために事物単体を描いて、それに対する単語を示すのではなく、図像として様々な事物が配置されている全体の関連性の中で個別の事物や人物を把握し、キャプションを与えたところに特色がある。そして、さらに相互関連性を読み取り、読み取り解説として加えることが行われた。歴史研究に図像を活用するための情報源として提供したのが『絵巻物による日本常民生活絵引』であった。絵引は高く評価され、日本中世の生活史研究に不可欠な研究工具書となり、研究者の座右におかれ活用されている。

今回編纂を進めた『東アジア生活絵引』中国江南編は、この『絵巻物による日本常民生活絵引』の編纂方式を、日本以外の文化において編纂可能かどうかを実験したものであった。日本では人々の生活の中に絵画が入り込んでおり、しかも写生という方法で記録したり、情報を伝えたりすることが古くから行われてきた。絵引編纂の条件が各時代ですでに準備されていた。それに対して、中国および朝鮮半島においては、図像と人々の関係は日本ほど濃密なものではなかったことが、検討の結果判明してきた。事物や人物を写生して、ありのまま示そうということがそれほど行われなかったし、そのような行為が高く評価されなかった。絵引編纂の前提は、その時

代の生活を写實的に描いた図像の存在である。東アジアの各文化ではそのような図像は限られていることを痛感し、その数少ない写實的図像を対象に絵引を編纂することにした。中国については、18世紀に制作された徐揚「姑蘇繁華図」が絵引編纂にもっとも相応しい図像であると判断し、絵引編纂に取り組んだ。

「姑蘇繁華図」は、18世紀の蘇州とその周辺を實態に合わせて描いた図巻であった。絵には膨大な数の人物が描き込まれていることに示されているように、蘇州とその郊外の生活を写實的に生き生きと描いている。単なる風景画ではない。規範化された形式で描かれた絵画が圧倒的に多い中国において非常に珍しい存在である。そのことが生活絵引編纂の対象にした最大の理由である。

「姑蘇繁華図」は全長12メートルに及び、太湖近くから始まり、近郊都市と農村を描き、次いで蘇州城を描くというように、対象も変化に富んでいる。この内容豊かな「姑蘇繁華図」の総てを対象に絵引を編纂することは不可能であると判断した。人物だけでも4000人を超えるのである。12メートルあまりの図像のなかから生活を描き出している部分を50カ所切り取り、それについて絵引編纂を進めることにした。

この絵引は日本で編纂し、刊行するものである。事物や人の行為を日本語で表記することが前提であった。特定の文化のなかの事物や行為を異なる言語で把握し表記することは非常に困難なことである。日中辞典や中日辞典の項目をみて、当てはめればよいというものではない。個別の事物を中国で何とよいかを確認しつつ、それを誤解のない形で日本語で表記することを行った。これが予想以上に困難な作

業であった。研究の中心はそこにあった。

また、図のなかに描かれた事物や人の行為を関係性のなかで読み取り、解説することを並行して進めた。切り取った図幅のなかに描かれた内容を、演劇の舞台にたとえば、大道具、小道具そして役者も含めて全体として把握し、解説することを試みた。その場合、主役・脇役が展開する物語の筋を重視することはせず、あくまでも舞台設定上の関係性を重んじた。言い換えれば、主役にスポットライトをあてて読み取るのではなく、全体の組み合わせを重視することで解説を行った。

50枚余りの図像は、様々な場面を示している。「姑蘇繁華図」は蘇州城とその郊外を描いた絵画である。実際に現地比定出来るように、どの図も固有名詞としての地名や施設名を伴っている。しかし、絵引は蘇州地方史のための資料整理と情報発信ではない。中国江南地方の18世紀の生活を把握するための絵引編纂であった。従って、固有名詞の究明には重点を置かず、生活事象の把握と読み取りを中心的行った。

果たしてこの『東アジア生活絵引』中国江南編が成功したかどうか分からない。日本で開発された絵引という編纂方式が日本以外の諸地域・諸文化でも可能かどうかを試みたものである。我々が言う試案本である。編纂にあたった者としては、絵引の編纂に一応成功し、絵引という方式が日本以外においても可能であることを示したと思っている。しかし問題点も少なくない。今後、本書を手にした人々の批判から学び、より一層内容があって、東アジア生活文化研究に役立つ絵引に補訂・増補をしていくつもりである。

(ふくた あじお)

【参考文献】

- 金貞我 2006 「都市図における風俗表現の機能」人類文化研究のための非文字資料の体系化第1班編『図像から読み解く東アジアの生活文化』（神奈川大学21世紀COEプログラム シンポジウム報告3）所収
- 巖麗妍編 1988 『清・徐揚《姑蘇繁華図》』香港商務印書館
- 蘇州市城隍檔案館・遼寧省博物館編 1999 『姑蘇繁華図』文物出版社
- 戴立強 2006 「『姑蘇繁華図』と『清明上河図』」人類文化研究のための非文字資料の体系化第1班編『図像から読み解く東アジアの生活文化』（神奈川大学21世紀COEプログラム シンポジウム報告3）所収
- 張英霖 1999 「歴史画卷《姑蘇繁華図》」蘇州市城隍檔案館・遼寧省博物館編『姑蘇繁華図』文物出版社、所収
- 範金民 2004 「清代蘇州城市文化繁栄の写照—《姑蘇繁華図》」熊月之・熊秉真編『明清以来江南社会与文化論集』上海社会科学院出版社、所収
- 秉琨 1986 「清徐揚《姑蘇繁華図》紹介と欣賞」遼寧省博物館・中国歴史博物館・蘇州市地方志編纂委員会編『盛世滋生図』文物出版社
- 馬宝傑 1999 「徐揚《姑蘇繁華図》賞析」蘇州市城隍檔案館・遼寧省博物館編『姑蘇繁華図』文物出版社、所収
- 遼寧省博物館 2006 『清徐揚姑蘇繁華図賞析』北京東方博古文化芸術発展有限公司
- 遼寧省博物館・中国歴史博物館・蘇州市地方志編纂委員会編 1986 『盛世滋生図』文物出版社